

第4期第13回生涯学習センター運営協議会議事要旨

〔日 時〕 2019年11月21日（木）午後6時～8時

〔場 所〕 町田市生涯学習センター 学習室1・2

〔出席者〕 ※敬称略

委 員：柳沼恵一（会長）、大野浩子、白崎好邦、鈴木忠道、辰巳厚子、堂前雅史、
服部くに子、古里貴士、向井美子、米倉茂、 以上10名

事務局：塩田センター長、田中担当課長、大野管理係長、高木事業係長、三橋主任（記
録）

〔欠席者〕 ※敬称略

太田まゆみ、陶山慎治 2名

〔傍聴人〕 なし

〔資 料〕【1】市民ニーズに沿った生涯学習センター事業の推進について」の作成につい
て(骨子案)1113

【2】第9回～第11回生涯学習審議会会議メモ

開 会

会 長：第13回生涯学習センター運営協議会を始める。次第に沿って進める。

1 報告事項

（1）センター長報告

- ・市では市民参加型事業評価という取り組みを経営改革室が所管となり以前から行っている。市の事業から評価対象として選んだものについて評価人数名が評価を行う。隔年で実施しているが今年度は11月24日・日曜日に市民フォーラム4階で行われ、生涯学習センターも対象となっている。今年度の対象事業の選定は、市内在住・在学の評価人となった高校生によって行われた。対象の7事業の内、生涯学習センターと図書館は1つの班となり、全部で6班の評価が行われる。コーディネイターのほか、有識者、一般市民、選定に関わった高校生など12名程度が評価人となる。生涯学習センターの時間は、午前10時15分から11時45分の予定で傍聴できます。

会 長：質問をどうぞ。

委 員：評価したものは何かに反映するのか。

センター長：最終的に評価結果が出される。評価区分は、「よく取り組んでいる」「一部要改善」「大きく改善が必要」、厳しいものでは廃止という評価が出される場合もある。その評価結果に沿った改善プログラムを所管課が作成していく。

委員：事前に評価する方々にはかなりの資料を渡しているのか。

センター長：我々と評価人とはミーティングを1回行い、そこで説明する。その後経営改革室と評価人との間でミーティングが2回程行われ、評価人からの質問があれば、我々にフィードバックされて回答する。

委員：高校生の評価は毎年行っているのか。

センター長：事業評価は2年に1回実施しているので、前回の一昨年からです。

委員：高校生が入る理由はどうしてか。

センター長：高校生世代に市政に関心を持ってもらうことが狙いです。

委員：関心を持つのは良いが、評価できるのか。

センター長：高校生だけでなくコーディネーターが1人、そのほか有識者として公認会計士、大学教授、一般市民は市政モニター制度に登録されている200人程度の中から2名参加されている。

委員：高校生は何人か。

センター長：6～7人いる。半分は高校生です。

委員：かなりしっかりした高校生です。

会長：市民参加型というかたちだが、一般参加者の意見は反映されないのか。

センター長：傍聴者に対してその場で我々の説明が分かり易かったか、そうでなかったかなどアンケートを実施するが、それは評価に直接反映されるものではない。

会長：ここでの評価がどうなるかは結構大きい。場合によっては廃止というケースは無くも無い。

センター長：4年前に文学館が、廃止も視野に入れて検討すべきという評価だった。その結果、部の中で文学館の存続について、文学館のあり方を検討した経緯がある。

会長：ということなので、できるだけ皆さんも参加していただければと思う。

(2) 町田市生涯学習審議会での議論について

会長：資料2に基づき説明する。生涯学習審議会での議論は、運営協議会とオーバーラップもするし、これから議論する市民ニーズに沿った事業の推進と連動して考えていかなければならないと思う。

委員：どういうふうに連動するのか。

会長：審議会は審議会ですとまとめをされ、この運営協議会の議論も独立的にまとめていくことになる。ただ、二つが違った方向であってはならないという意味で、連動

という言い方になった。あくまでもそれぞれの会議体でそれぞれのまとめ方を
する。

委員：違った方向ではないものとして、それぞれ出すということだが、そういう調整
はしないのではないか。

会長：審議会は諮問があつて、それに対する回答を出す。こちらの会議体は、セン
ター長に対して報告し、それが更に教育委員会に報告される。諮問と我々がやって
いることは違うと理解していただければ。

委員：こちらから一人代表として審議会に出て意見を述べられるが、内容の調整をす
るということは無いのですね。

会長：特にはないです。審議会ではこちらの例えば前期の報告書を十分に踏まえた上で
議論されている。そういう意味では我々のこの議論が、ある程度反映される。取り
入れられているということも示されていると思う。

委員：誤解を招くといけないので。10回目のところの市民フォーラムへの誘導で、
登録団体は施設利用料無料となっているが、男女平等推進センターに登録した団
体だと、そういう特典もある代わりに、男女平等推進センター祭りに関わることにな
り、ものすごく大変なので、この書き方だと誤解を招くなと思う。ただ登録すれ
ば優先的に無料で使えるというわけではない。やはり男女平等の理解や推進も含
めてということなので。

会長：社協も同じですね。緑のHATSは無料でした。社協にボランティア活動の実績を
報告しないとイケませんでした。

委員：ではフォーラムではなく、ボラセンでということ。フォーラムと一括してし
まうと3階と4階が全部混ざってしまうので。

会長：では審議会の動きも頭に入れながら今後の議論を進めたいと思う。

(3) 東京都公民館連絡協議会の活動について

委員：委員部会は前回運営協議会から今までに2回、10月15日と11月19日にあ
った。2月1日開催の第56回東京都公民館研究大会の分科会について、黄色いチ
ラシの裏面に4つの課題別集会の記載があるが、委員部会はこの課題別集会を担
当する。この企画、運営についての話し合いを行った。案内は各市に来ている。次
に、第1回委員部会の研修会が9月7日にあり、町田市からの参加は大野職員
と私だった。全体の申込み66名に対して当日参加者55名で、内訳は公運審委員
42名、職員10名、市民3名でした。今回、加盟市以外にも案内したが、参加は
なかった。市民3名は少なかったので、PR方法を考えたほうがよかった。講演の
「公民館の活性化～若者に魅力ある公民館にするには～」は好評だった。ポイン
ト的には、若者を公民館に惹きつけるためには単に我々だけで企画するのではな
く、若者自身の考え方や行動の支援が必要ということだった。最後に、委員部会
の情報交換で公民館の有料化について、現状がどうなっているか各市の状況のとり
まとめをした。加盟市は11市あるが、使用料をとらないのは小金井市と国立市、

西東京市の3市、その他の8市は使用料の設定がある。ただし100%に近いかたちで使用料をいただいているのは町田市と狛江市。ほかは利用者団体に登録するとか、社会教育の話し合いをする団体はお金をとっていない。これを情報交換して各市に持ち帰り機会があったときに自分の意見としていこうということです。

センター長：今の話は貸出施設の使用料が、有償か、無償かということで、講座の受講に対してとは違いますね。

委員：はい。受講後にサークル化して、その活動場所として借りる時です。

会長：それでは議題に入ります。1年半にわたっていろいろ議論してきました「市民ニーズに沿った生涯学習センター事業の推進について」ですが、これから報告書のまとめに入ろうということで、事務局から骨子案を資料1に沿って説明していただきます。

事務局：資料1についてです。その前に、今期残りの協議会は本日を入れて4回です。4回で報告書をまとめていくのはタイトですが、進め方・見通しについて、本日骨子案として骨組みを見ていただき、あと2回、事務局が報告書案を作成し、次回と次々回2回で検討していただき固める。最後の4回目は2月の開催予定ですが、事業評価、事業分析の時間をいただく回となるので、そこでは最終的な確認をしていただく運びになる。この点についてお諮りします。

会長：この提案でよろしいか。今日が11月21日、次回が12月20日、その次が1月23日、最終回が2月19日です。今日を含めて残り4回。2月は事業分析に実質的時間がとられてしまうので議論はできないため2回で報告書をまとめるかたちになる。今日、骨子案を固め、事務局がそれに基づき素案を次回提出する。そこでさらに議論し、修正・追加を加えて1月23日にほぼ最終案をまとめるという提案ですが、ご質問は。

委員：去年3月まで審議会の委員をやっていたが、その時も報告書をまとめるにあたりタイトなかたちでやった。事務局が骨子案に肉付けしていくと思うが、その過程で会長、副会長がその案を見て調整するかたちでした。次の12月、1月まで、そういう調整をしていくと考えていいのか。

会長：この骨子案についても、いろいろつき合わせながらまとめた経緯がある。その方向で、委員からこの場でご発言もいただき、メール等で意見を反映させたいということであれば、それも取り入れるという形で進めたい。

委員：2月は事業分析があるため、ほぼ出来上がった案が出て、せいぜい「てにおは」や最終確認くらい。12月と1月で叩くということですね。

会長：足りない部分はメールのやりとりなどで補ってゆく。

委員：議事録もそうだが事前に配ってもらわないと議論が空回りしてしまう。早め

に素案を出してもらい 1 週間から 10 日前には欲しい。23 日の 10 日くらい前に素案をメールで送ってもらいたい。議事録も遅れている。この場で初めて見てもしょうがないので約束していただきたい。

事務局：これからの作業ですが、その日程で。

会 長：これまで資料は 1 週間前ですが。

委 員：10 日前を目途にもらえると有効な議論ができる。

会 長：ではそういう希望があったということで、検討してください。

委 員：大丈夫ですか。

事務局：やってみます。

会 長：よろしくお願いします。

事務局：それでは改めまして資料 1 をご覧ください。

資料 1、「市民ニーズに沿った生涯学習センター事業の推進について」の作成について（骨子案）1113 について説明

委 員：部数はどれくらい作るのか。

事務局：あまり多くは作りません。

委 員：できればカラーで。あと図案に直せるものは目で見て分かり易く。要望です。

会 長：要望ですね。前は文字だけでしたが。

委 員：3 番の「汲み取る」は「吸い上げる」に変えたはずですが。あと 1 番の例示で出てきたものは埋まっていて、その向こう側にある議論の本質が現れていない。例えば「一般市民の目線で捉えなければいけませんね」と議論したことはアンケートにも表れていた。この組織自体が認知されていないということが大前提として、そこからスタートしたほうが良い。そうしないとサラッと読んで終わってしまうような気がする。例えば（1）の①から④は、これをいきなり出すと、これを議論してきたような気がするがそうではなくて、これは例示です。一般市民のニーズに対応するなら、あくまでも市民目線でどういうものかというのを見なきゃいけない。議論の中でこれが出たという言い方は可能だと思う。次に（2）の市民一人ひとりニーズは異なるということは、どのように多様性があるのかということをお話しないと当たり前なので。あと、市民ニーズを二つに分けているが、これは良くわからなくて、もうちょっと吟味してもらったほうが良い。こういう分け方でいいのか、これはたぶんホワイトボードで議論したときの話。

事務局：現に生涯学習センターが事業系と管理系という両輪で動いているというところからです。

委員：そのへんは疑問があったので、吟味してみてください。3番のところ（1）と（2）を分けていますが、比べると（2）はレベルが違うような気がする。

事務局：まちチャレのことを紹介するということで、確かにほかのところとはちょっと取扱いが違う。トピック的な感じがするが、市民ニーズに直接答えようとしている活動のことを書きたいということで差し込んでいます。

委員：（1）で仕組みの話がいろいろあり、サブとしてまちチャレがあり、他にもあるかもしれないから、そういう分け方をしたほうが良い。（1）も（2）もポイントが出てくると、このようなものではないような気がする。まちチャレがセンターでやっている事業の中でそれほど大きいものかと感じている。4番の（1）、NAVIのことだが、コスト効果という言葉を入れて吟味していただきたい。（2）、本当に困っている人のニーズというのがよくわからなかった。認知されていないことが一番大きいような気がしている。生涯学習センターが知られていない、関心がない、そういうことに対して、もっと関心をもってもらい、例えば障がい者教育や子どもとの関係で、やっている人たちだけでは広がりには限界がある。今8割くらい関心がない人たちをインボルブしないといけない。やりたい人がどんどん仲間づくりをするのも大事だが生涯学習センターがやるべきことは、無関心な8割の人たちをもっと関心を呼んで、今までやってきた活動に引き込むというスタンスが必要じゃないかという思いで言っている。最後に一言、この協議会の進め方について、いくつか提案してきたつもりだが、これも議事録1期から3期を見て、大体最後に同じことを言っている。この進め方も改善したほうが良いと触れておいたほうが良い。その理由は、議論をしたという実感が無いから。気づいたことを、こうしたほうが良いんじゃないかと提案した記憶はあるが、皆さんと一つのテーマ、二つのテーマを議論して、「そうですね」というところも、〇〇先生のホワイトボードの時一回だけ。だから、進め方を変えた方がもっと効果的じゃないかと思う。

委員：市民ニーズについて②、高齢退職者の地域生活のところは、議論された結果だと思うが、高齢退職者という言葉が腑に落ちない。リタイアされた方という意味か。それとも高齢者の地域生活ということか。

事務局：リタイアされた方というのが近いと思う。今日、追加でお配りした第11回の再配布という資料の中で高齢退職者の地域生活を充実させるというところがあり、ここに記録されていたワードをそのまま使っている。

会長：どうするのがいいですか。

委員：経験値や、豊富な知恵や知識を地域にフィードバックしてもらってという意味でしたね。

委員：退職しているかいないかは関係ない。シニアとかそういう言い回しがいいか。シニアのスキル、経験値。

会 長：シニア世代でしょうか。

事務局：シニア世代とします。

委 員：各委員のコメントは3行から4行か。

事務局：過去はそのボリュームだったということだけなので、決めていただければ。

委 員：2倍から3倍、15行くらい。3～4行では「いい経験になりました」だけで見た人には何の情報も無い。

会 長：前は2ページで収まっている。倍くらいはあっていいかも知れない。

委 員：総ページ数は決まっていらないのですね。

事務局：はい。

委 員：論文にはしないけど、感想文ではつまらないから挨拶抜きで。

事務局：カラー刷りとか製本は予算的に難しいが、ページ数は多少増えても影響はありません。皆さんが書いたもののバランスがとれれば。本文が決まらなると皆さんに書いていただくものも決まらない。ある程度の分量ということで思っただければ。

委 員：1行40字、10行で400字。

委 員：300字から400字でいいのでは。

委 員：相当なボリュームになりませんか。

委 員：書くものがなければ書かなくていい。3～4行がマックスでどうかということです。

会 長：400字以内としましょう。

委 員：いつまでに出すのですか。

委 員：1月23日にある程度フィックスしないと書けない。

会 長：1月23日が終わってから、原稿締切は1月31日で。

委 員：出来上がったものはどこに配るのか。

事務局：この運営協議会で議論していただいたことを受け止めるのはセンター長、センター長はそれから教育委員会に報告するので製本は基本的には1部。昔は市民の方にたくさん用意して、紙ベースで持って行っていただいたが、今はインターネット上で協議会からこういう報告書が出ましたということで載せさせていただいている。カラーの話もありましたが、写真をカラーにするのはインターネット上ではできない。教育委員会などに出すには、冊子でないと報告しにくいこともあるので紙

ベースで印刷するが、印刷部数はそれほど多く作る予定はない。

委員：議事録と同じということですね。

委員：NAV Iについてですが。生涯学習センターを市民の8割がたが知らないことについて議論され、NAV I自体も前回4%弱の方が手にとって見ている。100人のうち4人です。私たち障がい者や高齢者の皆さんで、スマホとかインターネットを不得手にしている人たちもたくさんいると思う。その方たちのためにも、NAV Iは必要なものではないか。私も不得手なので活用させていただいている。配布先や部数について、これから精査することはあると思うが、NAV Iそのものはこれからも継続して行って欲しい。必要なものと思う。

会長：そういう人には必要なものということであれば、当然準備しなければいけない。若い人には別なツールがいいかもしれないし、そう人にも届けなければいけない。

委員：紙を目で見るというのはとてもいい方法だと思っているので、生涯学習センターを知っていただくためにもNAV Iは必要だと思う。

会長：無くせという意見は無いと思う。ただ、コストに見合ったパフォーマンスを得るために工夫が必要だというご指摘ですね。

委員：必要な人に必要な情報を必要な手段で、どうするかということです。400円かかって、大学に置いてあるというけれど多分そのまま捨てられてしまっている。アンケートで大学生は0。今のやり方は問題意識をもって変えなきゃだめと言っている。広報まちだは認知されていると思っている。あそこに講座情報があると見る。広報まちだは毎号読んでいる人が28%、広報まちだでさえ28%。大事なのは、広報は知らないというのは3割しかいない。NAV Iは8割です。こういう状況をデータから読み取って手を打たないとだめ。高齢者の人が大事に持って帰るというのはそれはいいんです。ただ、それを10年以上やっているということなので、そろそろ軌道修正をしたほうが良い。

委員：配布場所とか部数をこれから検討していかなければいけない。

会長：コストの中身は人件費でした。

委員：そういう議論は避けたほうがいい。それじゃ無駄な仕事をしているということになってしまう。危険な発言だと思う。あくまでも人件費も材料費もコストです。400円で、コスト効果の観点で見直しませんかという提案です。無くすとは言っていない。

委員：報告書の中身をどこまで書くか、どこまで具体的に提案するかということも問題になってきます。例えばNAV Iに関しても、高齢者の人たちにとっては大事な情報源だけど、大学生や若い人たちは活用していない。NAV Iを必要とするのは比較的高齢の方だと考えたら、例えば紙面を高齢者に見やすい紙面に作り変

えていくことも一つの考えだと思う。使っている方々が見てて大切な情報源だけどちょっと見づらいとか、それこそ字を大きくしてほしいとか、紙面の中身についても、必要な人に向けての紙面に作り変えていくことも一つの考え。今回の報告書にそこまでのことを書くのか、もうちょっと手前の総論的なことを書くのか、そのへんどうしたらいいでしょうか。

委員：大体同意ですが、そのへんのデータは4年に1回のアンケートでも如実に現れている。書くとしたら、「直近のアンケートではこうなっているから」「ここではこういう観点で議論しました」そこまでだと思う。推測で「大学生は見ない」だとか、それはあまり書かないほうがいい。あくまでデータを書いて、議論の観点を書くということがいいんじゃないか。本当は結論を書きたいけど、そこまでいかなかった。

委員：私はこの市民ニーズについて、まだまだ議論しつくされていない感じで、何をどこまで書くのかというのが見えてこない。報告書を出さなきゃいけないという、そこにあわせてしまうといつも議論も、報告書もお決まりの文章で、体裁よくまとめるかたちになってしまう。これまでもそうだったから。みんながもうちょっと市民ニーズのどこを議論するのか、というのをしっかり一つでも二つでも決めて、そこだけでもいいからもっと議論してみたいかがですか。

委員：その場合、例えば報告書の終わりに、今後検討しなければいけない課題が何かというのをいくつか整理して課題提示して終わるとするのは一つの報告書の書き方と思う。

委員：最初のスタートとしては、データを踏まえて私たちはどう見たかというところから出発しないと。漠然とみんな利用していないというのでは、報告書としてどうなのかなと思う。最後に、課題としてできなかったことは、できないでいいのではないか。だけど課題はこうですよということを明記できれば。

委員：では、今提示された骨子はどうでしょうか。

委員：みなさんが議論するということがあったら、しますし。

会長：1館しかなくて43万人の市民が対象になっている。いつでもだれでもが学べる環境をつくり、その成果を地域に還元できることを目指しているわけだから、1館であるということは問題である。そこをクリアするためには、どうしたらいいのかを考えると地域にどれだけのパイプを持てるか、しかもそこに人だけではなくていろんな情報を提供できるかということを考えると、どうしてもICTの利用というのが重要になってくる。しかもその技術が進歩してきているから、初期投資などお金はかかるが、それをやっていけば、今、小中学校はICTが構築されて授業で活用されている。ここを拠点にして、ここから情報発信できれば、今は潤沢な資源は無いけれど、それをつくっていくことによって将来、地域に1館しかないセンターでも、地域展開が進められるんじゃないかというイメー

ジを持っている。いかがでしょうか。

委員：今回は市民ニーズということがテーマだから、とりあえず市民ニーズとは、それをどうとらえるかということで。ICTの問題はとても重要なので、来年のテーマはそれにしてもいいと思う。むしろ去年まで、1館しかないからいろんな拠点に出て行って、講座をやりましょうということでやりました。その地域の人々に来てもらいたい、知ってもらいたいということだったので、それも市民ニーズに添えていくひとつのチャレンジだったという成果になっている。ICTは最後に書く課題の一つにあっていると思う。

会長：ほかに課題となるのはなんでしょう。

委員：市民ニーズといっただけで考えてしまう。10年前とは状況が全然変わっていて、シングル世帯は確実に増えており、80歳になっても元気に働くシニアがいる時代になった。先日子どもセンターで出張講座をしたのですが、完全に対象を見誤りました。参加者は1～2才の子を持つ保護者と想定していましたが、結果0歳児ばかりでした。ママたちは働いているから産休中にしかそういうところに来ない。保育園さえ決まれば働きに行く。ニーズといった時に今の現状をちゃんと捉えないと全然わからないと思う。今までの関係の人だけだと見えてこない。ニーズを議論するなら実態を捉えたほうがいいのかなと思う。

会長：本当に困っている人のニーズにスポットを当て、という指摘がありますが。

委員：本当に困っている人は声をあげるひまなどない。

会長：斟酌するとどういうニーズがありますか。

委員：学習にいく余裕は無いと思う。それに回りが気付く仕組みとか、例えば市の事業でお弁当を届けるヘルプをする人がいる、それをどうやって支えていくのか、もう怖くて弁当持っていけないじゃなくて、それを聞いたらどこに繋いで、どう吸い上げていくか。かたちをつくるとか、支える側がうんと育つとか・・・。

会長：自分だけでということになってしまうとつぶれてしまう。

委員：そういう声をどうやって拾っていったらいいのかというのは周りの気付きとかそういうか形を作っていくしかないと思う。気付く人を増やすしかない。寄り添える人が増えたらいい。

委員：センターの事業で何をやるにしても心がこもらないと案が出てこない。事業をやるほうでこれは本当に重要なんだといえるようなアイデアを提案していかないとけない。

会長：〇〇さんのような方とお話できて、繋がっていないとそういう情報は入ってこない。

委員：吸い上げる仕組みの話を上げればいいのか。そういう仕組みをつくりましょうと

いう提案なんじゃないですか。さきほど会長は目指していることを言われたけれど、それはバーチャルな生涯学習センターを作りましょうということですか。

会長：市民大学とかいろんな講座をやっている。レベルの高い講座だが、聞ける人はここへ来た、たかだか100人程度の人しか権利がない。それをユーチューブなどで発信すると、それ以外の人でも自分の自由な時間の中で見ることができるし、そういう社会が身近に来ていると思う。そこに対応していく必要もあると思う。

委員：でも、著作権のことは大変です。私も企業でやったことありますが、先生方が困りますと言う。著作権は注意しなければいけない。

委員：写真1枚でもどこから取ったと全部入れないといけません。

委員：発想はいいけれども、なかなか簡単にはいかない。それに代わるものを、やっぱり100人じゃ少ないからその仕組みを考えなければいけない。

会長：著作権法はクリアしなければいけない。そうではないテーマもあるので、その内容を発信できればいいのかなと思う。

事務局のほうから材料が足りないということがありますか。

事務局：2の(2)市民ニーズに対する論旨の展開のところで、講座と情報というのはよくわからないというご意見や、2才の講座を想定していても0歳児が来たとか、10年前とは違うとか、ニーズの移り変わりは激しいというようなことを、在り来たりの実業と情報のことなど書かないで、そこに差し替えたほうがいいと思いました。また、ニーズについて話し足りないとか、本当に困っている人は声が上げられないので周りが気付く仕組みが必要だというのは、具体的なことを検討するにはまだ大変な段階だということを、例えば終わりにのところに課題として書かせていただくのもありかなと、今までのお話を聞いて思ったところです。

会長：では、それも次年度以降の重要な課題の一つというかたちで、声をあげられない人の声をどう反映していくのか、吸い上げるのが難しいことを課題としましょう。

事務局：アンケートする項目が何か足りない気がする。自分が生涯学習をどう思うのかという基礎調査があってから、それで生涯学習センターを参考にする気があるかないかとすると繋がってくる。これから調査をするときの聞き方があると思う。

会長：AIが発達している中で、自分自身でどんどん学んでいかなきゃ生活が成り立たなくなることが予想されるので、生涯学習そのものの価値というか、それは増大してゆくが、それをこのセンターがどうからめていくか。

委員：私が個人的に生涯学習の活動に参加したのは退職したあと、自分で創業してもいいし就職してもいいけど、それにプラスになる講座がないかなと、たまたま受講してそれで終わりではなくてその後の活動もあって、それがきっかけです。自

分の家内も、時間があつたときにHATSの講座情報とか市報を見て、気に入ったものに行っていた。関心がある人は参加するかどうかは別にしてもウォッチングしている。

委員：市民ニーズというのは背景としてたぶん今の話は重要だと思う。自分がやりたいこととか、自分の周辺の課題を解決できるのは生涯学習なんだという意識を持っている人と、生涯学習なんて頭に浮かばない人も多いと思う。前者の方はニーズという恰好で出しやすいとは思ふ。やっぱりそれどころじゃないとか、そもそも生活に余裕はあるけどそのものは思い浮かばないという人たちが生涯学習センターを使うとそれなりに生活が向上するとか、課題が解決することがあると思う。そういう潜在的ニーズというのと、2段構えで考えていくことも重要じゃないか。その形になっていないというのをおせっかいじゃない形でどういうふうに提示できるのか。

委員：そこで必要なのは、生涯学習センターの側がそういう人たちに目を向けていますよということを見せること。今はそこが何も無い。手をあげて、イベントダイヤルを申し込んでも、あなたはダメですでお終いなんです。講座の場合は声なき声を対象にして、それも踏まえてなんとかしようとしている、そういう意志を表現して欲しい。そうしないと、こっちに目が向かない。今はそうっていない。いつも1館しかない、1館しかないって言うてるが、本当は物理的なものではなくて、どういふことをやろうとしてますよということ意志表現してもらいたい。そこからじゃないと今言われたようなことが、こっちに目を向けてくれない。来てくれる人はたくさんいるけど、選択バイアスという言葉を出したけど、聞いたのは来てくれた人たちだけ。これが選択バイアスの罠です。本当は来ない人たちのことも考えないといけ無い。1年前にNAVIでアンケート取っている、何人ですか、10人、20人、それぐらいなんです。NAVIを読んでいる人たちに対して、アンケートをとってどうしましょうではどんどん狭まってしまう。もっとそうじゃない人たちに対して、生涯学習センターをこうしようとしてることを発信したほうがいい。そこからだと思ふ。表紙を見ても6階にあります来てください。こういうスタンスなんです。目を向けてる人は来るけど、そうじゃない人が8割。その8割をどうするかということに対しては、あなたがたの声なき声も吸い上げて何かしようと思つているということ発信することが第一と思ふ。

会長：自習している高校生が、はたしてどういふことでここに来ているのか。本来は子どもセンターが受け入れる立場にあるけど、そこには行かない。彼らにはあまり魅力がない。むしろこっちのほうが居心地がいい。それに対してどういふアプローチをしているのかといたら、コミュニケーションは難しいところがある。だけど彼らも市民の一人だし、市民参加型の評価では、半数を占めて評価に携わろうとしているわけだから一人の市民として捉えられていかなければならない。

委員：我が子もたまに勉強しに来ている。フォーラムもどこも知っているけど、ここに来ている。「まあち」はうるさいそうです。生涯学習センター、ここなら変な風

に構われないから、放っておいてくれることが逆に居心地がいいみたい。そういう子どもたちに「講座をやっているよ」とか言って、関心を持たれるかと言うと難しい。今、ネット空間が居場所であり、学校から帰ってきて何もしていないんじゃないかと、ネット上の中のどこかに居る。インスタグラムやラインなどSNSでの交流や、オンラインゲーム上などで集合し、放課後を過ごしている。そういうリアルな中高生たちをどうやって外に出すかということだが、中々出てこない。それは大人も同じで、駅周辺施設でイベントを開催しても、以前のように人が集まらなくなったと施設関係者は悩んでいる。

会 長：子どもセンターの担当者とどういう会話が成り立つのかとかそういう情報交換があれば、ちょっと変わってくるのかなと思う。

会 長：時間ですので今までの議論を踏まえて、骨子はこれでよさそうだとということで・・・。

委 員：いや。まだ骨子について〇〇先生のご意見があると思う。

委 員：もう少し絞って議論したところがあっていいのではないかと。市民ニーズという問題に対して私たちの問題意識はなんなのかというくらいでも少しはっきりさせたほうがいいのではないかと。(2)が先にきて(1)があとのほうが。せっかくいろんな立場の人がここに出てきているわけだから、それぞれにもっと出してもらったほうがいい。

会 長：それはこの追加配布資料の中に対象となる市民ということで、具体例があげられている。それから市民ニーズの具体例も。③で、ここから選ぶことが一つの判断材料になる。この中から代表的なものとして、学習困難者以下いろいろな具体例が見られる。だからこの中に更に追加する。忘れちゃいけないというものがあれば・・・では、市民ニーズについては、まず考え方を(1)にして、その考え方に沿った具体例として今(1)になっているところを(2)にする。順序を変えます。

委 員：(1)と(2)は二つないといけないですか。

会 長：では(1)に包括的な捉え方を言って、2番目で具体的な多様性のある市民ニーズについて例示するということで。

委 員：市民ニーズではなくて学習ニーズでは？

委 員：いえ。ニーズは学習だけではない。生涯学習センターの事業内容を見ると、学習だけではない。

会 長：生涯学習センターは学習です。周辺の環境はいろいろあるけれど、

委 員：いろいろな地域の課題を学習という面からみているのが学習センターです。

会 長：限界はあるが、教育というのは基本だからそこはしっかりしていないと問題解

決にならないと思う。

委員：学習という二文字でも、学ぶ、誰から誰に何を学ぶか。シニアというと自分が教えるほうです。学習に対応する高齢者は自己研さんとか、別の言葉が出てくる。学習という二文字は、生涯学習センターと言っているのだからそこでやめておきましょう。また定義しなくてはいけなくなるから。

委員：念頭にはそれがあるということで。

会長：対象とするのは、あくまでも市民ニーズの中の学習に対するニーズ。それにどのように対応していくか。この応えるというのもちよっと一方的すぎるかな。寄り添うというほうがいいと思う。4の(2)で市民ニーズに応えるための事業展開とあるけれど、これだとレスポンスするということに近い表現なので、むしろニーズに寄り添った事業展開のほうが適切かなという気がします。いずれにしろとりあえずこの骨子で進めてみましょう。ニーズについては、順序を変えてもいいというかたちで取り組んでいただいて、どうしてもというのであればこれでもいいし、そのへんは出していただきたい。

会長：最後に「その他」でありますね。

事務局：2月1日の東京都公民館研究大会は皆さんにご参加いただくための予算があります。参加を極力お願いします。当日はほぼ1日かかりとなりますがよろしく願います。

会長：ではよろしく願います。

次回は12月20日です。本日はお疲れさまでした。